白柳秀湖『維新革命前夜物語』の特質（2）

―明治維新は「維新革命」か、1930 年代の論争―

小畑嘉丈*

On Shirayanagi Shuko's "the story of the eve of Meiji Revolution"（2）

―Was Meiji Restoration Meiji Revolution? A controversy over Meiji Restoretion in 1930s―

OBATA Yoshitake*

Abstract

The Meiji Restoration became called "a revolution" in the debate over the characteristics of the Meiji Restoration again in the 1930s, but the opinion to emphasize revolutional characteristics of the Meiji Restoration disappeared in a movement of ultranationalism in the domestic situation, and in the rise of Nazism and Fascism.

キーワード：維新革命，封建革命，民間史学，講座派，労農派

Keywords：Meiji revolution, feudal revolution, a n anti academic historian, Koza-ha, Rono-ha

１．はじめに

1930 年代に、明治維新は再び「革命」となった。更に正確に言えば、「革命」であるかどうかが論争となった。

本稿で主な考察の対象とする白柳秀湖（1884～1950）よりも 20 歳以上年長の徳富蘇峰（1863～1957）や竹越與三郎（1865～1950）らにとっては、明治維新は「維新革命」であり、更には、「新日本」建設のために明治維新を承けた第二の「革命」を実現することが重要な課題であったが[1]、その後天皇制が確立され、皇室の万世一系性が強調されるようになるにつれ、明治維新が「革命」と呼ばれることは少なくなっていった。

しかし 1930 年代に至って所謂「日本資本主義論争」が生じ、明治維新がブルジョア革命であったかどうかが議論の対象となり、「維新革命」という言葉が再び浮かんでくることとなった。大別すると、明治維新をブルジョア革命と規定する立場の者は「維新革命」という言葉を使い、これと対立する立場の論者は「維新の変革」という言葉を用いた。

白柳秀湖は 1934 年に『維新革命前夜物語』を刊行している。題名からわかるように、秀湖は明治維新を革命と規定しており、日本資本主義論争における労農派と同じく「明治維新＝ブルジョア革命」説に立っている。『維新革命前夜物語』において展開される「明治維新ブル革論」は二本の柱から成っており、一つは明治維新の実現主体であった各藩の下士階級が地方ブルジョアと「同根」の存在であったがゆえに、下士階級革命である明治維新はブルジョア革命といえる、という主張、もう一つは、明治維新は、幕末に試みられた「封建革命」が失敗に終わった後に、次の段階の革命（＝ブルジョア革命）として起きたという、ある種の二段階革命論である。

＊理工学部共通教育群非常勤講師　Part-time Lecturer, Division of Liberal Arts, Naturel, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

本稿では、『維新革命前夜物語』の検討を通じて、日本資本主義論争の一端を明らかにし、また秀湖の明治維新観を描き出すことを目指す。なお、『維新革命前夜物語』は 1934 年に出された書物だが、1947 年に改訂版が刊行されており、水野忠邦と吉田茂・石橋湛山を比較するなどの文章が書き加えられているが[2]、本稿はこの改訂版に基づいている。

2.「下士階級・地方ブルジョア同根説」

まず、秀湖が何を批判対象として「明治維新＝ブルジョア革命」説を主張しているのかを確認したい。

「近頃の若い経済史家の中には、事新しく日本の明治維新をブルヂョア革命でないとして異を立てる人もあるようだ。それらの人の鹿爪らしい官学的手法は、何ほどか世間のこけを威すに効果があり、日本の事情にくらい外国の歴史家の中にも、それらの説に誤られて日本の明治維新を一種の『封建革命』であるなど論ずるもののあるやにきくのはいかにも笑止千万なことだ」[3]

「明治維新をブルヂョア革命でないとして異を立てる」「近頃の若い経済史家」とは講座派を指すのであろう。秀湖は、初めて発表した歴史作品である『町人の天下』（1910 年）以来、幕藩体制下における町人の活発な経済活動を叙述してきたため、そうした観点から講座派を批判する立場に立ったものと考えられる。

いわゆる「日本資本主義論争」の論点は小作料論争、マニュファクチュア論争、明治維新の歴史的性格など幕末・維新史の諸問題に及んだが、本稿と直接関わりがあるのは無論明治維新の歴史的性格、すなわち、明治維新をブルジョア革命とみるか否かという論点である。周知の通り、「講座派」は明治維新をブルジョア革命ではないと主張した。

まず、講座派の見解を押さえておこう。講座派の一人だった小林良正は、論争からおよそ 40 年後に同論争を回顧して次のように述べている。「「講座派」を目して、「ブルジョア的発展」の軽視とか無視とかいって、目の敵のように攻撃している労農派が、少なくともその「幕末論」では、ブルジョア的発展について、はなはだ消極的であったことは、むしろ奇妙なことというのほかはない。もっとも労農派の幕末軽視は、なにも、向坂＝労農派だけのことではなく、むしろ伝統的、伝来的なものかもしれない。というのは、オリジナル労農派ともいうべき、山川均、猪俣津南雄においても、その維新論において、幕末段階分析があるのかどうか、私の記憶では、幕末論あるを知らない（中略）ともかく「社会主義協会」＝労農派の場合、明治維新論にいたってまったく突如として、ブルジョアジーが出てくることは、今も昔も変わるところがない」[4]

「ところで労農派が、その明治維新論にさいして、唐突に持ち出してくるブルジョアジーとは、きわめて抽象的な概念で、いわば、ブルジョアジー・シュレヒトヒンというようなもので、このようなものを具体的な歴史論議のなかに持ち込むこと自体が、無意味である」[5]

「「維新はブルジョア革命だ」といいながら、カンジンのブルジョアジーはその「幼弱」とやらのゆえに、「主役」を下級武士に委ねて、自分は、いったいどうなってしまったのか、まったく行方不明である。なおかつ「下級武士革命論」だといわれるのがイヤならば、せめて下級武士とブルジョアジーとの関係でも、一言付け添えるべきではなかったのか？それくらいのことなら、ブルジョア史学でも、先刻やっていることである」[6]

秀湖は労農派ではないが、小林の批判に対応するところが多い。秀湖には『日本富豪発生学　下士階級革命の巻』、『維新革命前夜物語』などの幕末論があり、秀湖の日本におけるブルジョアジー論は『町人の天下』以来なので、「明治維新論にいたってまったく突如として、ブルジョアジーが出てくる」わけではない。小林の言う「いわば、ブルジョアジー・シュレヒトヒンというようなもの」とは要するに具体例を欠いているという批判だが、「幕末ブルジョアジー」の具体例を挙げているのが『日本富豪発生学　下士階級革命の巻』だ。また「下級武士とブルジョアジーとの関係」について、秀湖は下士階級と地方ブルジョアが同根の存在であったとの説を提示している。まずはこれらの点についての秀湖の議論を見ていきたい。

秀湖曰く、「この著者の『日本富豪発生学』はすなわち、維新革命に陰の役者として立働いた都市ブルヂョアと舞台の正面に華々しく踊った各藩の下

士階級とが、その発生学上の根元を同じくするものであるということを論証する為に執筆されたもので、まだ3巻を発表しただけであるが、それだけでもわが明治維新を以て、『封建革命』であるなどという妄説を粉砕するには十分のものと信ずる」[7]。つまり、維新の「舞台」に乗っていた下士階級が都市ブルジョアジーと同根の存在だから下士階級革命＝ブルジョア革命だと論じていることになる[8]。秀湖の「下士階級・地方ブルジョア同根説」がどのようなものだったかをみるために、まずは『日本富豪発生学』を参照することとしたい。

『日本富豪発生学　下士階級革命の巻』で、秀湖は長州の下士階級について「長藩の下士階級なるものが、すべて山城屋和助であり、藤田傳三郎であるべき素質をそなえていた。若し長藩に山城屋和助がいず、藤田傳三郎がいなかったとしたら、いわゆる長閥の中で、誰かがその代理を勤めなければならなかったものに相違ない」[9]と述べ、更には「『町人』として還元し得るものは倒幕主義の志士、浪人即ち各藩の下士階級ばかりではない。旗本も御家人も新撰組も彰義隊も、おおよそ維新の戦線に登場する一切のチャンバラ（原文ママ）はすべてこれを『町人』として還元することが出来るのだ」[10]とまで述べているが、なかでも、本質としてはブルジョアであった下士階級武士[11]の例として挙げているのは坂本龍馬、山城屋和助（野村三千三）、藤田傳三郎、伊藤博文などである。

このなかで、伊藤については秀湖の説をやや詳しく検討したい。

「伊藤の家は町人から成上がり、長藩で『仲間』と呼ばれた下士の『株』を買って出たものであった。しかもその父は伊藤家の養子でもとは百姓の出である（中略）伊藤の家は町人で、『士』の株を買うほどであったから井上の家よりは遙かに裕福であったに相違ない」[12]

「伊藤は下士という点からいえば、井上と同じであったが、その下士は町人階級から金の力で成上がったものである（中略）封建時代の階級思想から全くきれいに脱けきった伊藤の人間味は、即ちそれが純然たる中間階級の出であったからである」[13]

白柳は「中間階級」という言葉をブルジョアと同じ意味で用いているので[14]、伊藤を下士階級＝ブルジョアの例とみていることになるが、伊藤についての秀湖の説明には疑問がある。池辺三山が伊藤を豊臣秀吉になぞらえたことはあったが[15]、伊藤家が「金の力で成上がった」と論じる者は稀である[16]。秀湖は、伊藤家が株を買って仲間（下士の身分の一つ）となり、また博文の父は「伊藤家の養子」だと言うが、一般には博文の父・十蔵は伊藤家の養子となることで仲間になったと説明される。伊藤家の養子となる前の十蔵は豪農だったわけではない[17]。1846年に破産した十蔵は再起すべく萩に出て、3年で家族を呼び寄せたというので[18]、勤勉な性格だったのかも知れないが、それ以上のことは詳らかではない。伊藤をブルジョアとするのは妥当ではないのではないだろうか。

山城屋と藤田にしても、権力を奪取して、その権力を商業活動に利用した政商の側面が強いように思われ、明治維新の以前から本質的にはブルジョアと変わらない存在だったと言えるのかどうかはいささか疑問である。

明治維新の実行主体が下士階級だったことには議論の余地がない。労農派など維新をブルジョア革命だと規定する論者にとっては、ここが一番の難点だったのではないか。それが、秀湖が翌年刊行した『民族日本歴史　近世編』[19]に表れている。秀湖は『日本富豪発生学　下士階級革命の巻』では山城屋や藤田などが維新後に経済活動に乗り出したことを取り上げて「下士階級がブルジョアジーと同根の存在である証拠」と主張したが、『民族日本歴史』では「株を買って割り込んだ下士階級の生活は、全く『素町人』と何のえらぶところもなかった。しかもその多くは素町人以下の惨めな勤労生活を営んでいた（中略）下士階級こそは町人以下の町人であったのだ」[20]として、生活苦で以て下士階級の「非武士性」を強調しようとしており、議論の力点が変わっている。

次に、秀湖の言う「革命」とはどのような意味であったのかについて、『維新革命前夜物語』のテキストに沿って検討したい。

3．二つの「封建革命」から下士階級革命へ

秀湖は幕末の政治変動を天保の改革、文久の改革、

明治維新という流れで捉えており、それぞれを（挫折した）「封建革命」、「上士階級維新」、維新革命と呼ぶ。文久の改革のみ「革命」とは表現していないが、これは再度の「封建革命」に位置づけられている。また、「革命」の担い手が下降していく図式があることがわかる。つまり、幕府自身による「革命」（「徳川氏が、徳川氏のために、徳川氏の力の限りに於いて為し得る」[21]）、幕府外の上士による革命から下士階級による革命、という流れである。

「封建革命」とは何か。秀湖自身は明確な定義を与えていないが、参勤交代の停止を中心とする改革を念頭に置いているようだ[22]。秀湖は幕藩体制を「半郡県的封建制度」と呼ぶが、その幕藩体制を、完全な封建制度ではなく「半郡県的」なものたらしめている大きな要因が参勤交代であったとみている[23]。したがって、参勤交代の停止によって完全な封建制度を確立することを「封建革命」と呼んでいると解釈することができる。

参勤交代は徳川幕府にとって「祖法」であり、その取りやめは確かに大変革であるが[24]、それを一般的な意味で「革命」とは表現しないだろう。秀湖は徂徠の『太平策』などの献言を「原始的封建制度に戻せ」という意味だと解しているが[25]、それならむしろ、革命というよりは反動である。天保の改革に参勤交代停止構想があったのだとしても、それを一般的な意味で「革命」と呼ぶことは出来ないだろう。にも拘わらず秀湖が天保の改革を「封建革命」と呼ぶ理由として考えられるのは、明治維新をブルジョア革命でなく「封建革命」と呼ぶ論者に対して[26]、その段階は既に天保の改革の時点で過ぎており、明治維新はその先に位置するブルジョア革命であった、と強調することが目的だったのではないだろうか。

次に、「上士階級維新」について検討したい。秀湖は文久の改革を「維新」として「維新革命」とはしていないが、一方で、再度の「封建革命」にも位置づけている[27]。秀湖が天保の改革と文久の改革を連続視するのは、後者において参勤交代が緩和されたためであるようだが[28]、「文久の改革を『上士階級維新』と名づけたのは、著者がさきに『西園寺公望公傳』でこれをしたのが初めである」[29]と述べているので、再度の「封建革命」である「上士階級維新」の内容について、『西園寺公望公傳』のテキストを頼りに検討していきたい。以下は同書の文久の改革についての記述である。

「久光の行動は、正しく維新史に一新時代を画すべき仕事であった。何故となれば、大名が幕府の命令によるにあらずして兵を京都に進め、策を朝廷に献ずるさえあるに、天子から禁闕の警護を命ぜられるということは、徳川氏の伝統政策から見てどういうものであるか。『公武法制』が偽物であってもなくても、これは明らかに幕府の事実上の崩壊でなくして何であろう。況んや久光が勅使大原重徳を擁し、堂々と江戸に乗込んで幕政に干渉し、慶喜を将軍の後見とし、慶永を政務の総裁とし、会津侯松平容保を京都の守護職に、桑名侯松平定敬を京都の所司代に任じ、彦根侯の封邑十万石を削り、間部詮勝、安藤正信を追罰し、諸侯参勤の期を緩め、その妻子を国に移すことを承認するの止むを得ざるに至らしめたに至っては、実に事実上の王政復古と云ってよいではないか」[30]

「諸侯参勤の期を緩め」は、秀湖の見立てによれば天保の改革の延長線上にあることになるだろう。しかし、『維新革命前夜物語』では、文久の改革の筋書を書いたのは横井小楠であり、「荻生徂徠・水野越前・横井小楠・と伝わってきた『封建革命』の理念」[31]という図式が示されているが、『西園寺公望傳』にはそれがまだ見られない。

文久の改革を「事実上の王政復古」と表現することも、やはり「文久維新」も革命だったと述べるために思われるが（天保の改革→文久の改革→維新革命という三つの革命プロセス）、しかし参勤交代停止を中心とする封建制度を完成させるための革命と王政復古とでは、「革命」だとしても内容が違い、議論が錯綜している。ただし、文久の改革は当時においても革命的変化だとは受け止められていた[32]。

４．終わりに――『維新革命前夜物語』の後

秀湖は『維新革命前夜物語』を出してからおよそ半年後に『日本民族論』を刊行し、以後の活動のキーワードは「民族」になっていく。その時期の代表作が『民族日本歴史』だが、そこでは秀湖の幕末維新史が講座派批判を念頭に置いていたことが更に

明白である[33]。

ところが、そこでは天保の改革は「封建的新体制計画」と呼ばれ、「封建革命」と呼ばれることはない。そして、更に見逃せないのは、『民族日本歴史』では、明治維新も「維新革命」と呼ばれることはないということである。マルクス主義的経済史観から「日本民族論」に移行した秀湖は、日本民族の連続性を強調する立場に転じた。

江戸思想史の解釈も変化が大きい。荻生徂徠に最大の評価を与えている点は変わらないが[34]、『維新革命前夜物語』では「維新革命が水戸光圀の監修にかかる『大日本史』頼山陽によって書きおろされた『日本外史』の骨子となっている尊王賤覇思想を煽揚した各藩下士階級によって成し遂げられたという在来の歴史観が、必ずしも絶対の真理ではない」[35]「皇統の正潤（原文ママ）を論じたり、皇位継承の争閲を中心として捲起された臣子の去就（大義名分）を論じたりすることが、果たして正しい手法であろうか。歴史はどこまでも客観的事実の生成及びその発展に対する忠実な記述でなければならぬ。宋儒の倫理学説を基礎理念として書きおろされた水戸光圀の『大日本史』や、頼山陽の『日本外史』はほんとの歴史ではない」[36]としていたのに対し、『民族日本歴史』では「幕府は（中略）朱子学そのものの中から起った尊王賤覇の思想に対しては全く手を下さん術もなかった。徳川家康が天下泰平のためにと奨励した学問の普及は、やがて天下の武士に君臣の大義、上下の名分を知らせることとなったのだ」[37]「『大日本史』（中略）大覚寺統を正統とし、持明院統を閏位としたなど、みな光圀の裁断に出で、国民に大義名分の存するところを知らせる上に与って、非常な力となったものであった」[38]「町の歴史家として勤王の大義を唱道した人に頼山陽がある。山陽の著『日本外史』（中略）一般世俗に日本の国体を知らせる上に、非常に効果のあったものである。かれはこの著作をなすに当り、常に尊王賤覇の立場からわが国古来の出来事を叙している」[39]とする。180度の転換と見られる変化である。

この変化は『維新革命前夜物語』（1934年4月）と『日本民族論』（1934年9月）の間に起きている。秀湖は従来、大逆事件以降社会主義を離れたと指摘されてきたが[40]、『維新革命前夜物語』までは経済史観・唯物史観を保っている。秀湖の思想の大きな転換点は、『維新革命前夜物語』と『日本民族論』の間にあると捉えた方が適切なのではないか。『日本民族論』には、マルクス主義から離れつつあることを示唆する文もいくつか出てくる[41]。

秀湖の転換の要因として考えられるものの一つはファシズムの台頭である。1934年にはドイツでヒトラーが「総統」になっており、秀湖もそうした動きを意識して、『日本民族論』のなかで、「日本が真の全体主義国家である」との主張を行っている。「全体主義国家ということを、近頃人々の多くは、ヒットラアやムッソリーニが、英・米・仏・の自由主義的国家理念に対抗して打ち建てた新理論のように思惟しているようだが、これは途方もない考え違いだ。自由主義国家といい、また全体主義国家というのは、一にその国家の成立ちと発展とに基づくことであって、理論もしくは理念でなく、事実もしくは歴史であるのだ。英・米・仏・三大先進国家が生え抜きの自由主義国家であれば、日本は生え抜きの全体主義国家だ」[42]。

秀湖は更に、『日本民族論』において「日本民族優秀説」にも言及しており[43]、「革命」に触れなくなったことと合わせ、思想が「時局」的なものに回収されつつあることがわかる。

秀湖の維新史論はファシズム台頭期に変質したが、『維新革命前夜物語』において示した、天保の改革をと幕藩体制崩壊の決定的なポイントとする見方は、以降一般的なものになっていった。代表例としては、遠山茂樹『明治維新』も、叙述を天保の改革から始めている。天保の改革までが「維新前夜」であり、そこからが明治維新だと捉えられるようになっていった。

明治維新は日本資本主義論争の中で数十年ぶりに「革命」と呼ばれるに至ったが、再びそう称された期間は短かった。それは秀湖においては思想の大きな変化の表れでもあった。彼は大逆事件を経験し、また、桂太郎首相・大浦兼武内相の時代が弾圧が最も厳しかったと繰り返し語っている。しかし、思想の最も大きな変化はそこで起きたのではなく、自ら時流に乗らんとして生じたものであった。

※引用文の表記は現代仮名遣いに改めたところがある。

参考文献　等

白柳秀湖『西園寺公望傳』日本評論社、1929 年

白柳秀湖『日本富豪発生学　下士階級革命の巻』千倉書房、1931 年

小林良正『日本資本主義論争の回顧』白石書店、1976 年

白柳秀湖『維新革命前夜物語』千倉書房、1947 年

白柳秀湖『日本民族論』千倉書房、1934 年

白柳秀湖『新版民族日本歴史　近世編』千倉書房、1946 年

---

[1] 苅部直『日本思想史の名著 30』（筑摩書房、2018 年、p. 190）。山路愛山も含め、民友社の論者は、明治維新を革命視する点で一致している。

[2] 「水野越前守忠邦が徂徠の『太平策』を最後の切札として懐中に秘め、徳川氏が、徳川氏のために、徳川氏の力の限りにおいて為し得る『封建革命』に乗り出した時の幕府の財政情態は、現に著者がこの書を校訂しつつある昭和 22 年 3 月現在、敗残日本の吉田内閣が、石橋蔵相を活きた盾として真っ向に押し立て、資本主義制度擁護のために共産党及び左翼社会党の陣営に対し、最後の一戦を挑もうとしている現状と頗るよく似たものがあった（中略）かれは封建的門閥の家に生れ、その身分の故を以て徳川幕府に執政官として推挙せられ、将軍のためにあらゆる手段を尽くして現行制度の生命を延長すべき一切の権限を委ねられて乗り出したのだ。かれとして執るべき途は、たといそれが出来ない相談であると知っていたにしても、徂徠の『太平策』を最後の切札として、その綱領を出来得るところまで推し進めてみるより外になかったのかも知れない。それは吉田首相と石橋蔵相とが現行資本主義制度の基礎理念である経済学の素養によって身を立て、生を営み、現行資本主義制度の生命を延長するために起ち上がった立場と頗るよく似たものがあるのだ」（白柳 1947、pp. 19-20）。秀湖は徳川幕府が倒れたのと同じように、資本主義体制も崩壊するのではないかと感じていたのだろうか。後述するように、秀湖は『維新革命前夜物語』を書いた後、マルクス主義から離れていくが、敗戦後にかつての感情が蘇ってきたとも想像される。

[3] 白柳 1947、p. 368

[4] 小林 1976、pp. 65-66

[5] 小林 1976、p. 67。なお「シュレヒトヒン」（schlechthin）は「正真正銘、そのもの」といった意味であり、労農派の想定するブルジョアジーに相当する具体例は存在しないと批判していることになるだろう。

[6] 小林 1976、p. 69。なお、「幼弱」と「主役」は山川均の言葉。ここで小林は、山川均「政治的統一戦線へ」（『労農』1927 年 12 月号）を批判している。さて、「ブルジョア史学」に秀湖は含まれるのだろうか。参考として講座派の始祖である野呂栄太郎の文章を引用する。「これはイギリスの光栄革命、フランス大革命にたいする理解をもって、ただちに明治維新の変革を類推せんとするものであって、一般的、公式的理解にとどまり、明治維新の本質的特徴を全体性的にかつ媒介具体性において把握することなき点において、前二説とえらぶところがない滝本誠一博士、白柳秀湖氏、渡辺幾治郎氏らのブルジョア急進主義者、ならびに一般公式社会主義者の所説はこれに近い」（『野呂栄太郎全集』上巻、新日本出版社、p. 166）。秀湖は「一般公式社会主義者」に分類されるのだろうか。「ブルジョア史学」はマルクス主義歴史学以外の歴史学を一括りにした用語なので、社会主義者とされるならば「ブルジョア史学」とは目されていないことになるだろう。

[7] 白柳 1947、pp. 368-369

[8] 小林は、秀湖も関心の対象とした豪商と下士階級の関係について次のように述べている。「大商人から、これら尊王志士の手に流れた資金は、決して少額のものとはいえない。これらの資金にしても、客観的には、町人の懐から、下級武士の手に流れ、そしてその下級武士が、討幕を達成したというわけで、これを、ブルジョア革命といえるのであろうか？」（小林 1976、p. 77）「明治初年にいたって成立する新政府の台閣に列したものは、少数の公卿のほかは、有力な下級武士のみであり、三井組、島田組など、町人のなかからは、何人もこれに参加するものはなかった。なおかつ「明治維新はブル革だ」といい切れるか？　だから山川均も、前述のごとく、「ブルジョア革命の発端」（傍点原文）と逃げたのである。まず少なくとも、1867～1868 年を、最小限度の明治維新とみるかぎり、上に縷述したところでも明らかなように、決して「ブルジョア革命」とはいえない」（同 p. 79）

[9] 白柳 1931、p. 103。なお、秀湖は続けて、山城屋と藤田がいなければ、井上馨がその代わりに商業活動を行っただろうと示唆している。「井上馨は明治政府に顕要の地位を占め、政権の枢機におりながら、これらの御用商人を操縦し、必要以上に立入ってその世話を焼いたから、世に批難の声が絶えなかったようなものの、これも社会という広い大きな眼から見ると、幾分気の毒な感じがせぬでもない」（同 p. 103）

[10] 白柳 1931、p. 55

[11] 秀湖は「下士階級＝ブルジョア」についてこう述べている。「各藩の下士階級というのは、社会上、武士の階級に編入すべきものか（中略）著者はそれを両者の何れにも属せぬ一種の中間階級（即ちブルヂョア）であったと断定したい。明治維新がすべて町人階級の仕事であったといったら異議が多かろう。それなら町人階級といわず、中間階級といったらどうか。それでも異議があるか」（白柳 1931、p. 5）「長藩でも、薩藩でも、肥藩でも、下士階級は維新の改革が一段落を告げると、驚嘆すべき素早さと、あざやかさとで一斉に町人階級への転化を始めた。それは転化ではない還元だ。何故となれば、下士階級はその本質上、封建的中間階級の一種である。之を著者の発生学から云えば、同じ社会的縁由によって生じた封建的中間階級が、分れて一は都市ブルヂョアとなり、他は地方ブルヂョアとなり、地方ブルヂョアが更に分れて、下士階級となったり、名主となったり、豪農となったりしたものであるからである」（同 p. 13）

[12] 白柳 1931 年、pp. 104-105

[13] 同上 pp. 105-106

[14] 注 11 を参照。

[15] 「日本でこういう立身出世をした人が外にあるとすれば、それは太閤さんの外にはないと思う。太閤さんは尾張中村の百姓の家に生れ、伊藤公は長州東荷村百姓十蔵の一子、十六七のころから来原某や桂小五郎の若党と也、やがて長州の侍分に取り立てられ、風雲に際会してとうとう総理大臣――昔の関白になった」（池辺三山『明治維新三大政治家』中公文庫版、1975 年、p. 139）

[16] 伊藤が金銭に淡泊だったと言われることは多い。例えば岡義武が紹介する逸話は以下の通りである。「伊藤にはまた蓄財の念もなく、金銭に淡泊であった」「伊藤の晩年に彼の妻が 1 カ月分の経費を請求したとき、彼は持合せがないから、金が入用ならこの滄浪閣を売って大井の恩賜館に引込もう、といった。彼の妻が、いま入用というのに家を売るのでは間に合いませんと笑ったところ、それならそちらでどうとも都合してくれといい、何ら意にとめようとしなかった」「大磯では、金をテーブルの抽出しに入れておき、それをつかみ出して袂に入れて外出し、ひいきにしていた旅館の招仙閣などに行き、袂からいい加減に又つかみ出して勘定もせずに女中に心付けとして与えたりした」「名古屋の魚文という宿屋で遊興したが、その女将は曽つて松村謙三に語っていった、伊藤公は賑かに騒がれた揚句勘定を払うことなく帰られた、そして、2 年か 3 年に 1 度紙幣を一杯つめた鞄を持参し、その中から鷲掴みに札を掴んで与え、勘定が合うか合わぬかは一向意に介されなかった」（以上は岡義武『近代日本の政治家』岩波現代文庫版、2001 年、pp. 42-43）

[17] 「十蔵の所有地は田五段、畑二段、山林六段にすぎなかった

ので、家計はあまり豊かとはいえなかった（『伊藤博文伝』上巻、5 頁、末松謙澄『孝子伊藤公』12～13 頁）」（伊藤之雄『伊藤博文』講談社、2009 年、p. 22）

[18] 同上 p. 23

[19] 初版は 1935 年に出ているが、本稿では 1946 年に出た新版によった。

[20] 白柳 1946、pp. 158-159

[21] 白柳 1947、p. 19。なお、このゆえに「だから『維新革命前夜物語』は水野忠邦以後に出て、いわゆる非常時日本の政治をひきうけた『幕末の政治家』を取扱わぬ」とあり（同 p. 334）、「維新革命前夜」を水野忠邦による天保の改革までとしている。

[22] 「越前守はこの改革を第 1 段として、更に第 2 段の改革に入る底意であった。第 2 段の改革は何であるか。それは諸大名の妻孥を国へかえし、参勤交代の制度を停止するか、若しくは、停止するにひとしい大修正をそれに加える腹であった。かれの畢竟の目的は、徳川氏の封建制度を改革して領主をその領土に固着させることにあったに相違ない」白柳 1947、p. 351

[23] 「徳川氏が織・豊・両政権の遺業を継承して貨幣制度の基礎を定め、諸大名の江戸参勤交代制度を法制化するに及び、源頼朝によって樹立された原始的封建制度の産出した農村の富が、諸大名及び諸武士（領主及びその家の子・郎等・）の倉庫から、その領土の付属物であった百姓・凡下・（農奴）の手から、滔々として都会に流れ込み、大町人層の市廛の裏に蓄積されることとなった」白柳 1947、p. 3

[24] 「参勤交代の制度は徳川氏の憲法である。これを改正するということは、いかなる権力者といえども容易に口にすべからざることである」（白柳 1947 年、p. 347）。したがって、参勤交代と並ぶ改革の急所である「飛地の整理から取りかかろうとした」（同 p. 348）。

[25] 「しかるに徂徠は将軍に献言して、現に行われている半郡県的封建制度に大手術を施し、これを鎌倉時代の原始的封建制度に戻せと結論している」白柳 1947、pp. 13-14

[26] なお戦後歴史学における「封建革命」とは中世史に関する用語であり、例えば松本信八郎の「南北朝封建革命説」や、安良城盛昭の「太閤検地封建革命説」である。いずれも「封建革命」は、（完全な）封建制度の確立を意味している。一方で、秀湖が批判する「封建革命」は、講座派の「明治維新は地主制などに封建的要素を残したままの変革だった」という主張をそう呼んでいるのであろう。なお、講座派は明治維新がブルジョア革命であることは否定するが、野呂栄太郎は明治維新を「革命」と表現する。例えば「明治維新は明らかに政治革命であるとともに、また広範にして徹底せる革命であった」（『野呂栄太郎全集』上、新日本出版社、1965 年、p. 58）「明治維新は、あきらかに強力的政治革命であったとともに――いな、あったがゆえに、また広範なる社会変革であった」（同 p. 165）。一方で、山田盛太郎『日本資本主義分析』（岩波書店、1977 年）は「維新変革」、平野義太郎『日本資本主義社会の機構』（岩波書店、1934 年）は「明治の変革」で表現を統一しており、明治維新を「革命」とは呼ばない。

[27] 「弘化 2 年水野越前守が免職されてから、慶応 3 年、王政復古の大号令が全国に轟きわたるまで、凡そ 20 年ばかりの間に、今一度、荻生徂徠の筋書・水野越前守の経綸・を種本にした『封建革命』が試行された（中略）誰が文久上士階級維新、いいかえれば島津氏の公武合体主義に基調する『封建革命』の筋書を作ったかということである。この立案者は熊本の学者 横井小楠その人であった」白柳 1947、pp. 369-370

[28] 「文久維新の時、幕府が父祖二百幾十年の家憲を改正して、諸大名の妻孥を国へかえし、参勤交代の期を緩めたのは、これまで多くの歴史家により、漠然と時局が切迫し、国防の事が急を告ぐるに至ったからと解釈されてきたが、実は決してそういう一時凌ぎの政策ではなかった。荻生徂徠・水野越前・横井小楠・と伝わってきた『封建革命』の理念を識るものにして、初めてその意義の深さを識り得る」白柳 1947、pp. 370-371

[29] 白柳 1947、p. 370

[30] 白柳 1929、pp. 74-75。

[31] 白柳 1947、p. 371。

[32] ロシア領事は本国への報告書の中で参勤交代の緩和について「わが国と日本との関係に間違いなく変化をもたらすに違いない巨大な変革が今、日本で準備されつつあります」と報告し、『ジャパン・ヘラルド』も「日本ではこの 1 週間に革命が行われた。静かにデモ一つなく国の基本構造が変わったのだ」と報じている（伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』吉川弘文館、2009 年、pp. 208-209）

[33] 「著者はかくして、明治維新を封建的残存勢力の手によってなされた封建的新体制計画であったと解釈する共産主義系統の若い歴史家の謬見に対して駁撃を加えると同時に」云々（白柳 1946、解題 p. 11）。

[34] 「天下の偉観は何といっても古文辞学の荻生徂徠（本書第 362―378 ページ参照）である。その学的体系の巍然として、世界最高峰の一つにいることはいうまでもなく」（白柳 1946、p. 505）

[35] 白柳 1947、p. 4

[36] 白柳 1947、p. 15

[37] 白柳 1946、p. 503

[38] 白柳 1946、p. 509

[39] 白柳 1946、pp. 513-514。なお、「町の歴史家」は秀湖が自らを表現するのによく用いていた表現である。

[40] 秀湖は社会民衆党の結党宣言起草委員に名を連ねている（1926 年）。

[41] 白柳 1934、序 p. 7、p. 26

[42] 白柳 1934、p. 495

[43] 白柳 1934、序 p. 1、序 p. 8